

服装に就いて

太宰治

青空文庫

ほんの一時ひそかに凝こった事がある。服装に凝こったのである。弘ひろ前さき高等学校一年生の時である。縞しまの着物に角帯をしめて歩いたものである。そして義ぎ太だ夫ゆうを習しいに、女師匠のもとへ通ったのである。けれどもそれは、ほんの一年間だけの狂態であつた。私は、そんな服装を、憤怒もつを以てかなぐり捨てた。別段、高こう邁まいな動機からでもなかった。私が、その一年生の冬季休暇に、東京へ遊びに来て、一夜、その粹人の服装でもって、おでんやの縄のれんを、ぱつとはじいた。こう姉さん、熱いところを一本おくれでないか。熱いところを、といかにも鼻持ちならぬ謂いわば粹人の口調を、真似たつもりで澄さましていた。やがてその、熱いところを我慢して飲み、かねて習い覚えて置いた伝でん法ぽうの語彙ごいを、廻まわらぬ舌に鞭打むちうちつて余すところなく展開し、何を言つていやがるんでえ、と言いひ終はつた時に、おでんやの姉さんが明るい笑顔で、兄さん東北でしょう、と無心に言つた。お世辞のつもりで言つてくれたのかも知れないが、私は実に興覚めたのである。私も、根からの馬鹿では無い。その夜かぎり、粹人の服装を、憤怒を以て放ほう擲てきしたのである。それから、普通の服装をしているように努力した。けれども私の身長は五尺六寸五分（五尺七寸以上と測定される事もあるが、私はそれを信用しない。）であるから、街を普通に歩いていても、少

し目立つらしいのである。大学の頃にも、私は普通の服装のつもりでいたのに、それでも友人に忠告された。ゴム長靴が、どうにも異様だと言うのである。ゴム長は、便利なものである。靴下が要らない。足袋たびのままで、はいても、また素足にはいても、人に見破られる心配がない。私は、たいてい、素足のままではいていた。ゴム靴の中は、あたたかい。家を出る時でも、編上靴のように、永いこと玄関にしゃがんで愚図ぐずぐず愚図ぐずぐずしている必要がない。すぼり、すぼりと足を突込んで、そのまますぐに出発できる。脱ぎ捨てる時も、ズボンのポケットに両手をつつこんだままで、軽く虚空を蹴けると、すぼりと抜ける。水溜りでも泥路でも、平気で濶歩かつぽできる。重宝なものである。なぜそれをはいて歩いては、いけないのか。けれどもその親切な友人は、どうにも、それは異様だから、やめたほうがいい、君は天氣の佳い日でもはいて歩いている、奇を衒てらっているようにも見える、と言うのである。つまり、私がおしやれの為にゴム長を、はいて歩いていると思っているらしいのである。ひどい誤解である。私は高等学校一年の時、既に粹人たらむ事の不可能を痛感し、以後は衣食住に就いては専らもっぱら簡便安価なるものをのみ愛し続けて来たつもりなのである。けれども私は、その身長に於おいても、また顔に於いても、あるいは鼻に於いても、確実に、人より大きいので、何かと目ざわりになるらしく、本当に何気なくハンチングをかぶって

も、友人たちは、やあハンチングとは、思いつきだね、あまり似合わないね、変だよ、よした方がよい、と親切に忠告するので、私は、どうしていいか判らなくなってしまうのである。細工さいくの大きい男は、それだけ、人一倍の修業が必要のようである。自分では、人生の片隅に、つましく控えているつもりなのに、人は、なかなかそれを認めてくれない。やけくそで、いつそ林銑十郎閣下のような大鬚おおひげを生やしてみようかとさえ思う事もあるのだが、けれども、いまの此この、六畳四畳半三畳きりの小さい家の中で、鬚ばかり立派な大男が、うろうろしているのは、いかにも奇怪なものらしいから、それも断念せざるを得ない。いつか友人がまじめくさった顔をして、バアナアド・シヨオが日本に生れたらとても作家生活が出来なかつたろう、という述懐をもらしたので私も真面目に、日本のリアリズムの深さなどを考え、要するに心境の問題なのだからね、と言い、それからまた二つ三つ意見を述べようと気構えた時、友人は笑い出して、ちがう、ちがう、シヨオは身の丈七尺あるそうじゃないか、七尺の小説家なんて日本じゃ生活できないよ、と言って、けろりとしていた。私は、まんまと、かつがれたわけであるが、けれども私には、この友人の無邪気な冗談を心から笑う事は出来なかつた。何だか、ひやりとしたのである。もう一尺、高かつたなら！ 実に危いところだと思つたのである。

私は高等学校一年生の時に、早くもお洒落^{しやれ}の無常を察して、以後は、やぶれかぶれで、あり合せのものを選択せずに身にまとい、普通の服装のつもりで歩いていたのであるが、何かと友人たちの批評の対象になり、それ故、臆^{おく}して次第にまた、ひそかに服装にこだわるように、なつてしまつたようである。こだわるといっても、私は自分の野暮^{やぼ}つたさを、事ある毎に、いやになるほど知らされているのであるから、あれを着たい、この古代の布地で羽織を仕立させたい等の、粹^{いき}な欲望は一度も起した事が無い。与えられるものを、黙つて着ている。また私は、どういうものだか、自分の衣服や、シャツや下駄^{げた}に於いては極端に吝^{りん}嗇^{しやく}である。そんなものに金銭を費す時には、文字どおりに、身を切られるような苦痛を覚えるのである。五円を懐中して下駄を買いに出掛けても、下駄屋の前を徒^{いた}らに右往左往して思いが千々に乱れ、ついに意を決して下駄屋の隣りのビヤホオルに飛び込み、五円を全部費消してしまうのである。衣服や下駄は、自分のお金で買うものでないと思ひ込んでいるらしいのである。また現に、私は、三、四年まえまでは、季節季節に、故郷の母から衣服その他を送つてもらつていたのである。母は私と、もう十年も逢わずにいるので、私がもうこんなに分別くさい鬚男になつているのに気が附かない様子で、送つて来る着物の柄模様は、実に派手である。その大きい紺^{かすり}の単衣^{ひとえ}を着ていると、私は角力^{すもう}の取^{とり}てき

のようである。或いはまた、桃の花を一ぱいに染めてある寝巻の浴衣ゆかたを着ていると、私は、
 ご難の楽屋で震えている新派の爺さん役者のようである。なっていないのである。けれど
 も私は、与えられるものを黙って着ている主義であるから、内心少からず閉口していても、
 それを着て鬱然と部屋のまま中にあぐらをかいて煙草をふかしているのであるが、時たま
 友人が訪れて来てこの私の姿を目撃し、笑いを噛み殺そうとしても出来ない様子である。
 私は鬱々として樂しまず、ついに立つてその着物を或る種の倉庫にあずけに行くのである。
 いまは、もう、一まいの着物も母から送ってもらえない。私は、私の原稿料で、然るべき
 衣服を買い整えなければならぬ。けれども私は、自分の衣服をかう事に於いては、極端
 に吝嗇なので、この三、四年間に、夏の白緋一枚と、久留米緋くろめがすりの単衣を一枚新調しただけ
 である。あとは全部、むかし母から送られ、或る種の倉庫にあずけていたものを必要に
 応じて引き出して着ているのである。たとえばいま、夏から秋にかけての私の服装に就いて
 言うならば、真夏は、白緋いちまい、それから涼しくなるにつれて、久留米緋の単衣と、
 銘仙めいせんの緋の単衣とを交互に着て外出する。家に在る時は、もっぱら丹前下たんぜんの浴衣であ
 る。銘仙の緋の単衣は、家内の亡父の遺品である。着て歩くと裾すそがさらさらして、いい気
 持だ。この着物を着て、遊びに出掛けると、不思議に必ず雨が降るのである。亡父の戒め

かも知れない。洪水にさえ見舞われた。一度は、南伊豆。もう一度は、富士吉田で、私は大水に遭い多少の難儀をした。南伊豆は七月上旬の事で、私の泊っていた小さい温泉宿は、濁流に吞まれ、もう少しのところで、押し流されるところであつた。富士吉田は、八月末の火祭りの日であつた。その土地の友人から遊びに来いと言われ、私はいまは暑いからいやだ、もっと涼しくなってから参りますと返事したら、その友人から重ねて、吉田の火祭りは一年に一度しか無いのです、吉田は、もはや既に涼しい、来月になったら寒くなります、という手紙で、ひどく怒っているらしい様子だったので私は、あわてて吉田に出かけた。家を出る時、家内は、この着物を着ておいでになると、また洪水にお遭いになりますよ、といやな、けちを附けた。何だか不吉な予感を覚えた。八王子あたりまでは、よく晴れていたのだが、大月で、富士吉田行の電車に乗り換えてからは、もはや大豪雨であつた。ぎつしり互いに身動きの出来ぬほどに乗り込んだ登山者あるいは遊覧の男女の客は、口々に、わあ、ひどい、これあ困つたと豪雨に対して不平を並べた。亡父の遺品の雨着物を着ている私は、この豪雨の張本人のような気がして、まことに、そら恐しい罪悪感を覚え、顔を上げることが出来なかつた。吉田に着いてからも篠^{しの}つく雨は、いよいよよきかんで、私は駅まで迎えに来てくれていた友人と共に、ころげこむようにして駅の近くの料亭に飛び

込んだ。友人は私に対して気の毒がつていたが、私は、この豪雨の原因が、私の銘仙の着物に在るということを知っていたので、かえつて友人にすまない気持で、けれどもそれは、あまりに恐ろしい罪なので、私は告白できなかった。火祭りも何も、滅茶滅茶になった様子であった。毎年、富士の山仕舞いの日に、木花咲耶姫このはなさくやひめへお礼のために、家々の門口に、丈余の高さに薪を積み上げ、それに火を点じて、おのおの負けず劣らず火焰かえんの猛烈を競うのだそうであるが、私は、未だ一度も見えていない。ことしは見れると思つて来たのだが、この豪雨のためにお流れになつてしまつたらしいのである。私たちはその料亭で、いたずらに酒を飲んだりして、雨のはれるのを待った。夜になつて、風さえ出て来た。給仕の女中さんが、雨戸を細めにあけて、

「ああ、ぼんやり赤い。」と呟つぶやいた。私たちは立つていつて、外をのぞいて見たら、南の空が幽かすかに赤かつた。この大暴風雨の中でも、せめて一つ、木花咲耶姫へのお礼の為に、誰かが苦心して、のろしを挙げているのであらう。私は、わびしくてならなかつた。この憎い大暴風雨も、もとはと言え、私の雨着物の為なのである。要らざる時に東京から、このこのやつて来て、この吉田の老若男女ひとしく指折り数えて待つていた楽しい夜を、滅茶滅茶にした雨男は、ここにいます、ということ、この女中さんにちよつとでも告白

したならば、私は、たちまち吉田の町民に袋たたきにされるであらう。私は、やはり腹黒く、自分の罪をその友人にも女中さんにも、打ち明けることはしなかった。その夜おそく雨が小降りになったところ私たちはその料亭を出て、池のほとりの大きい旅館に一緒に泊り、翌^{あく}朝は、からりと晴れていたので、私は友人とわかれてバスに乗り御坂峠^{みさかとうげ}を越えて甲府へ行こうとしたが、バスは河口湖を過ぎて二十分くらい峠をのぼりはじめたと思うと、既に恐ろしい山崩れの個所に逢^{ほうちやく}着し、乗客十五人が、おのおの尻端^{しりはしよ}折りして、歩いて峠を越そうと覚悟をきめて三々五々、峠をのぼりはじめたが、行けども行けども甲府方面からの迎えのバスが来ていない。断念して、また引返し、むなしくもとのバスに再び乗って吉田町まで帰って来たわけであるが、すべては、私の魔の銘仙のせいである。こんど、どこか早魃^{かんばつ}の土地の噂^{うわさ}でも聞いた時には、私はこの着物を着てその土地に出掛け、ぶらぶら^{やたら}矢鱈^{やたら}に歩き廻って見ようと思っている。沛^{はいぜん}然と大雨になり、無力な私も、思わぬところで御奉公できるかも知れない。私には、単衣はこの雨着物の他に、久留米緋の一枚ある。これは、私の原稿料で、はじめて買った着物である。私は、これを大事にしている。最も重要な外出の際にだけ、これを着て行くことにしているのである。自分では、これが一流の晴着のつもりなのであるが、人は、そんなに注目してはくれない。これを着て出掛

けた時には、用談も、あまりうまく行かない。たいてい私は、軽んぜられる。普段着のうに見えるのかも知れない。そうして帰途は必ず、何くそ、と反骨をさすり、葛西善藏かさいの事が、どういうわけだか、きつと思ひ出され、断乎としてこの着物を手放すまいと固執の念を深めるのである。

単衣からあわせ袷に移る期間はむずかしい。九月の末から十月のはじめにかけて、十日間ばかり、私は人知れぬ憂愁に閉ざされるのである。私には、袷は、二揃いあるのだ。一つは久留米緋で、もう一つは何だか絹のものである。これは、いずれも以前に母から送ってもらったものであるが、この二つだけは柄もこまかく地味なので、私は、かの街の一隅の倉庫にあずけずに保存しているのである。私は絹のものを、ぞろりと着流してフェルト草履ぞうりをはき、ステツキを振り廻して歩く事が出来なitchanaなので、その絹のものも、いきおい敬遠の形で、この一、二年、友人の見合いに立ち合った時と、甲府の家内の里へ正月に遊びに行った時と、二度しか着ていない。それもまさか、フェルト草履にステツキという姿では無かった。はかま袴をはいて、新しい駒下駄こまげたをはいていた。私がフェルト草履を、きらうのは、何も自分の蛮風をてら銜っているわけではない。フェルト草履は、見た眼にも優雅で、それに劇場や図書館、その他のビルディングにはいる時でも、下駄の時のように下足係の

厄介^{やっかい}にならずにすむから、私も実は一度はいてみた事があるのであるが、どうも、足の裏が草履の表の莫塵^{ごじん}の上で、つるつる滑つていけない。頗^{すこぶ}る不安な焦躁感を覚える。下駄よりも五倍も疲れるようである。私は、一度きりで、よしてしまった。またステツキも、あれを振り廻して歩くと何だか一見識があるように見えて、悪くないものであるが、私は人より少し背が高いので、どのステツキも、私には短かすぎる。無理に地面を突いて歩こうとすると、私は腰を少し折曲げなければならぬ。いちいち腰をかがめてステツキをついて歩いていると、私は墓参の老婆のように見えるであろう。五、六年前に、登山用のピツケルの細長いのを見つけて、それについて街を歩いていたら、やはり友人に悪趣味であると言つて怒られ、あわてて中止したが、何も私は趣味でピツケルなどを持ち出したわけではなかったのである。どうも普通のステツキでは、短かすぎて、思い切り突いて歩く事が出来ない。すぐに、いらいらして来るのである。丈夫で、しかも細長いあのピツケルは、私には肉体的に必要であつたのである。ステツキは突いて歩くものではない、持つて歩くものであるという事も教えられたが、私は荷物を持つて歩く事は大きいである。旅行でも、出来れば手ぶらで汽車に乗れるように、実にさまざまに工夫するのである。旅行に限らず、人生すべて、たくさんの荷物をぶらさげて歩く事は、陰鬱の基のようにも思われる。

荷物は、少いほどよい。生れて三十二年、そろそろ重い荷物ばかりを背負されて来ている私は、この上、何を好んで散歩にまで、やっかいな荷物を持ち運ぶ必要がある。私は、外に出る時には、たいていの持ち物は不恰好でも何でも懐ふところに押し込んでしまふ事に行っているのであるが、まさかステッキは、懐へぶち込む事は出来ない。肩にかつぐか、片手にぶらさげて持ち運ばなければならぬ。厄介なばかりである。おまけに犬が、それを胡乱うろんな武器と感じがいして、さかんに吠えたてるかも知れぬのだから、一つとして、いいところが無い。どう考えても、絹ものをぞろりと着流し、フェルト草履、ステッキ、おまけに白足袋という、あの恰好は私には出来そうもないのである。貧乏性という奴かも知れない。ついでだから言うが、私は学校をやめてから七、八年間、洋服というものを着た事がない。洋服をきらいなのではなく、いや、きらいどころか、さぞ便利で軽快なものだろうと、いつもあこがれてさえいるのであるが、私には一着も無いから着ないのである。洋服は、故郷の母も送って寄こさない。また私は、五尺六寸五分であるから、出来合いの洋服では、だめなのである。新調するとなると、同時に靴もシャツもその他いろいろの附属品が必要らしいから百円以上は、どうしてもかかるだろうと思われる。私は、衣食住に於いては吝嗇なので、百円以上も投じて洋装を整えるくらいなら、いつそわが身を断崖から怒濤どとうめが

けて投じたほうが、ましなような気がするのである。いちど、N氏の出版記念会の時、その時には、私には着ている丹前の他には、一枚の着物も無かったので、友人のY君から洋服、シャツ、ネクタイ、靴、靴下など全部を借りて身体に纏まとい、卑屈に笑いながら出席したのであるが、この時も、まことに評判が悪く、洋服とは珍らしいが、よくないね、似合わないよ、なんだって又、などと知人ことごとく感心しなかったようである。ついには洋服を貸してくれたY君が、どうも君のおかげで、僕の洋服まで評判が悪くなった、僕も、これから、その洋服を着て歩く気がしなくなった、と会場の隅で小声で私に不平をもらしたのである。たった一度の洋服姿も、このような始末であった。再び洋服を着る日は、いつの事であろうか、いまのところ百円を投じて新調する気もさらに無いし、甚だ遠いことではなからうかと思っている。私は当分、あり合せの和服を着て歩くより他は無いのであろう。前に言ったように衿は二揃いあるのだが、絹のものは、あまり好まない。久留米緋のが一揃いあるが、私は、このほうを愛している。私には野暮な、書生流の着物が、何だか気楽である。一生を、書生流に生きたいとも願っている。会などに出る前夜には、私は、この着物を畳んで蒲団の下に敷いて寝るのである。すると入学試験の前夜のような、ときめきを幽かに感ずるのである。この着物は、私にとって、謂わば討入の晴着のような

ものである。秋が深くなって、この着物を大威張りで着て歩けるような季節になると、私は、ほっとするのである。つまり、単衣から袷に移る、その過渡期に於いて、私には着て歩く適当な衣服が無いからでもあるのだ。過渡期は、つねに私のような無力者を、まごつかせるものだが、この、夏と秋との過渡期に於て、私の困惑は深刻である。袷には、まだ早い。あの久留米緋のお気に入りらしい袷を、早く着たいのだが、それでは日中暑くてたまらぬ。単衣を固執していると、いかにも貧寒の感じがする。どうせ貧寒なのだから、木枯しの中を猫背になってわななきつつ歩いているのも似つかわしいのであろうが、そうするとまた、人は私を、貧乏看板とか、乞食こじきの威嚇いかく、ふてくされ等と言って非難するであろうし、また、寒山拾得の如く、あまり非凡な恰好をして人の神経を混乱させ圧倒するのも悪い事であるから、私は、なるべくならば普通の服装をしていたいのである。簡単に言ってしまうと、私には、セルがないのである。いいセルが、どうしても一枚ほしいのである。実は一枚、あることはあるのだが、これは私が高等学校の、おしやれな時代に、こっそり買い入れたもので薄赤い縞しまが縦横に交錯されていて、おしやれの迷いの夢から醒めてみると、これは、どうしたって、男子の着るものではなかった。あきらかに婦人のものである。あの一時期は、たしかに、私は、のぼせていたのにちがいない。何の意味も無く、こんな

派手ともなんとも形容の出来ない着物を着て、からだを、くにやくにやさせて歩いていたのかと思えば、私は顔を覆って呻^{しん}吟^{ぎん}するばかりである。とても着られるものでない。見るのさえ、いやである。私は、これを、あの倉庫に永いこと預け放しにして置いたのである。ところが昨年の秋、私は、その倉庫の中の衣服やら毛布やら書籍やらを少し整理して、不要のものは売り払い、入用と思われるものだけを持ち帰った。家へ持ち帰って、その大風呂敷包を家内の前で、ほどく時には、私も流石^{さすが}に平静でなかった。いくらか赤面していたのである。結婚以前の私のだらし無さが、いま眼前に、如実に展開せられるわけだ。汚れた浴衣は、汚れたままで倉庫にぶち込んでいたのだし、尻の破れた丹前も、そのまま丸めて倉庫に持参していたのだし、満足な品物は一つとして無いのだ。よごれて、かび臭く、それに奇態に派手な模様のものばかりで、とても、まともな人間の遺品とは思われないしろものばかりである。私は風呂敷包を、ほどきながら、さかんに自嘲した。

「デカダンだよ。屑屋^{くずや}に売ってしまったても、いいんだけどね。」

「もったいない。」家内は一枚一枚きたながらずに調べて、「これなどは、純毛ですよ。仕立直しましょう。」

見ると、それは、あのセルである。私は戸外に飛び出したい程に狼狽した。たしかに倉

庫に置いて来た筈なのに、どうして、そのセルが風呂敷包の中にはいつていたのか、私にはいまもって判らない。どこかに手違いがあつたのだ。失敗である。

「それは、うんと若い時に着たのだよ。派手なようだね。」私は内心の狼狽をかくして、何気なさそうな口調で言つた。

「着られますよ。セルが一枚も無いのですもの。ちょうどよかったわ。」

とても着られるものではない。十年間、倉庫に寝かせたままで置いているうちに、布地が奇怪に変色している。謂わば、ようかんいろ羊羹色である。薄赤い縦横の縞は、不潔な渋柿色を呈

して老婆の着物のようである。私は今更ながら、その着物の奇怪さに呆れて顔をそむけた。あき

ことしの秋、私は必ずその日のうちに書き結ばなければならぬ仕事があつて、朝早く飛び起き、見ると枕元に、見馴れぬ着物が、きちんと畳まれて置かれてある。れのセルである。そろそろ秋冷の季節である。洗つて縫い直したものらしく、いくぶん小綺麗にはなつていたが、その布地の羊羹色と、縞の渋柿色とは、やはりまぎれもない。けれどもその朝は、仕事が気になつて、衣服の事などめんどつくさく、何も言わずにさつさと着て朝ごはんも食わずに仕事をはじめた。昼すこし過ぎにやっと書き終えて、ほっとしていたところへ、実に久しぶりの友人が、ひよっこり訪ねて来た。ちょうどいいところであつた。私

は、その友人と一緒に、ごはんを食べ、よもやまの話をして、それから散歩に出たのである。家の近くの、井いの頭公園かしらの森にはいった時、私は、やっと自分の大変な姿に気が附いた。

「ああ、いけない。」と思わず呻うめいた。「こりや、いけない。」立ちどまってしまった。

「どうしたのです。お腹なかでも——、」友人は心配そうに眉をひそめて、私の顔を見詰めた。

「いや、そうじゃないんだ。」私は苦笑して、「この着物は、へんじやないかね。」

「そうですね。」友人は真面目に、「すこし派手なようですね。」

「十年前に買ったものなんだ。」また歩き出して、「女ものらしいんだ。それに、色が変っちゃったものだから、なおさら、——」歩く元氣も無くなった。

「大丈夫ですよ。そんなに目立ちません。」

「そうかね。」やや元氣が出て来て、森を通り抜け、石段を降り、池のほとりを歩いた。

どうにも氣になる。私も今は三十二歳で、こんなに鬚ひげもじやの大男になって、多少は苦勞して来たような氣もしているのであるが、やはり、こんな悪洒落しやうみたいな、ふざけた着物を着て、ちびた下駄をはき、用も無いのに公園をのそのそ歩き廻っている。知らない人は、私をその辺の不潔な与太者と見るだろう。また私を知っている人でも、あいつ相変ら

ずでいやがる、よせばいいのに、といよいよ輕蔑するだろう。私はこれまで永い間、変人の誤解を受けて来たのだ。

「どうです。新宿の辺まで出てみませんか。」友人は誘った。

「冗談じゃない。」私は首を横に振った。「こんな恰好で新宿を歩いて、誰かに見られたら、いよいよ評判が悪くなるばかりだ。」

「そんな事もないでしょう。」

「いや、ごめんだ。」私は頑として応じなかった。「その辺の茶店で休もうじゃないか。」

「僕は、お酒を飲んでみたいな。ね、街へ出てみましょう。」

「その茶店には、ビールもあるんだ。」私は、街へ出たくなかった。着物の事もあるし、それに、きょう書き結んだ小説が甚だ不出来で、いらいらしていたのである。

「茶店は、よしませう。寒くていけません。どこかで落ちついて飲んでみたいんです。」友人の身の上にも、最近、不愉快な事ばかり起っているのを私は聞いて知っていた。

「じゃ、阿佐ヶ谷へ行ってみようかね。新宿は、どうも。」

「いいところが、ありますか。」

べつにいいところでも無いけれど、そこだったら、まえにもしばしば行っているのだから

ら、私がこんな異様な風態ふうたいをしていても怪しまれる事は無いであらうし、少しはお勘定を足りなくしても、この次、という便利もあるし、それに女給もない酒だけの店なのだから、身なりの顧慮も要らないだろうと思つたのである。

薄暮、阿佐ヶ谷駅に降りて、その友人と一緒に阿佐ヶ谷の街を歩き、私は、たまらない氣持であつた。寒山拾得かんざんじつとくの類の、私の姿が、商店の飾窓ガラスの硝子に写る。私の着物は、

真赤に見えた。米寿べいじゅの祝いに赤い胴着を着せられた老翁の姿を思い出した。今の此のむずかしい世の中に、何一つ積極的なお手伝いも出来ず、文名さえも一向に挙げらず、十年一日の如く、ちびた下駄をはいて、阿佐ヶ谷を徘徊はいかいしている。きようはまた、念入りに、赤い着物などを召している。私は永遠に敗者なのかも知れない。

「いくつになつても、同じだね。自分では、ずいぶん努力しているつもりなのだけれど。」歩きながら、思わず愚痴が出た。「文学つて、こんなものかしら。どうも僕は、いけないようだね。こんな、なりをして歩いて。」

「服装は、やはり、ちゃんとしていなければ、いけないものなのでしょうね。」友人は私を慰め顔に、「僕なんかでも、会社で、ずいぶん損をしますよ。」

友人は、深川の或る会社に勤めているのだが、やはり服装にはお金をかけたがらない性

質のようである。

「いや、服装だけじゃないんだ。もつと、根本の精神だよ。悪い教育を受けて来たんだ。でも、やつぱり、ヴェルレエヌは、いいからね。」ヴェルレエヌと赤い着物とは、一体どんなつながりがあるのか、われながら甚だ唐突で、ひどくてれくさかったけれど、私は自分に零落を感じ、敗者を意識する時、必ずヴェルレエヌの泣きべその顔を思い出し、救われるのが常である。生きて行こうと思うのである。あの人の弱さが、かえって私に生きて行こうという希望を与える。気弱い内省の窮極からでなければ、真に崇厳な光明は発し得ないと私は頑固に信じている。とにかく私は、もつと生きてみたい。謂わば、最高の誇りと最低の生活で、とにかく生きてみたい。

「ヴェルレエヌは、大袈裟だったかな？ どうも、この着物では何を言ったって救われないうよ。」やり切れない気持であった。

「いや、大丈夫です。」友人は、ただ軽く笑っている。街に電燈がついた。

その夜、私は酒の店で、とんだ失敗をした。その佳い友人を殴ってしまったのである。罪は、たしかに着物にあった。私は、このごろは何事にも怵こらえて笑っている修業をしているのであるからいささかの乱暴も、絶無であったのであるが、その夜は、やってしまった。

すべては、この赤い着物のせいであると、私は信じている。衣服が人心に及ぼす影響は恐ろしい。私は、その夜は、非常に卑屈な気持で酒を飲んでいた。鬱々として、楽しまなかつた。店の主人にまで、いやしい遠慮をして、片隅のほの暗い場所に坐つて酒を飲んでいたのである。ところが、友人のほうは、その夜はどうした事か、ひどく元気で、古今東西の芸術家を片端から罵倒し、勢いあまつて店の主人にまで食つてかかった。私は、この主人のおそろしさを知っている。いつか、この店で、見知らぬ青年が、やはりこの友人のようにな酒に乱れ、他の客に食つてかかった時に、ここの主人は、急に人が變つたような嚴肅な顔になり、いまはどんな時であるか、あなたは知らぬか、出て行ってもらいましょう、二度とおいでにならぬように、と宣告したのである。私は主人を、こわい人だと思つた。いま、この友人が、こんなに乱れて主人に食つてかかつているが、今にきつと私たち二人追放の恥辱を嘗める^なようになるだろうと、私は、はらはらしていた。いつもの私なら、そんな追放の恥辱など、さらに意に介せず、この友人と共に氣焰を挙げるにきまつてゐるのであるが、その夜は、私は自分の奇妙な衣服のために、いじけ切つていたので、ひたすら主人の顔色を伺い、これ、これ、と小声で友人を、たしなめてばかりいたのである。けれども友人の舌鋒^{ぜっぽう}は、いよいよ鋭く、周囲の情勢は、ついに追放令の一步手前まで来てい

たのである。この時にあたり、私は窮余の一策として、かの安宅あたかの関せきの故智こちを思い浮べたのである。弁慶、情けの折檻せつかんである。私は意を決して、友人の頬をなるべく痛くないように、そうしてなるべく大きい音がするように、ぴしやん、ぴしやんと二つ殴って、

「君、しっかりし給え。いつもの君は、こんな工合いでないじゃないか。今夜に限って、どうしたのだ。しっかりし給え。」と主人に聞えるように大きい声で言って、これでまず、追放はまぬかれたと、ほっとしたとたんに、義経は、立ち上って弁慶にかかって来た。

「やあ、殴りやがったな。このままでは、すまんぞ。」と喚わめいたのである。こんな芝居は無い。弱い弁慶は狼狽して立ち上り、右に左に体を、かわしているうちに、とうとう待っているものが来た。主人はまっすぐに私のところへ来て、どうぞ外へ出て下さい、他のお客さんに迷惑です、と追放令を私に向って宣告したのである。考えてみると、さきに乱暴を働いたのは、たしかに私のほうであつた。弁慶の苦肉の折檻であつた等とは、他人にはわからないのが当然である。客観的に、乱暴の張本人は、たしかに私なのである。酔つてなお大声で喚いている友人をあとに残して、私は主人に追われて店を出た。つくづく、うらめしい、気持であつた。服装が悪かつたのである。ちゃんとした服装さえしていたならば、私は主人からも多少は人格を認められ、店から追い出されるなんて恥辱は受けずにす

んだのであろうに、と赤い着物を着た弁慶は夜の阿佐ヶ谷の街を猫背になって、とぼとぼと歩いた。私は今は、いいセルが一枚ほしい。何気なく着て歩ける衣服がほしい。けれども、衣服を買う事に於いては、極端に吝嗇な私は、これからもさまざまに衣服の事で苦労するのではないかと思う。

宿題。国民服は、如何。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年12月1日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：青木直子

2000年1月28日公開

2005年10月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

服装に就いて

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>